



小中一貫教育に関する講演会から

去る8月17日(月)町保健福祉センターを会場に、町内小中学校・幼稚園の教職員によって組織される色麻町教育研究会主催の小中一貫教育に関する研修会がありました。研修会の内容は、県内の小中一貫教育先進校である登米市立豊里小中学校の先生による、小中一貫教育に関する講演会でした。詳しくは以下のとおりです。

演 題：「豊里小中学校の挑戦」 ～ 小中一貫校の立ち上げから今日まで ～

講 師：登米市立豊里小中学校 教諭 大森誠志 先生

講演の内容を要約すると、豊里小中学校は当初、校舎(施設)一体型小中一貫校として、平成18年度開校予定で準備を進めていました。ところが、校舎建設が1年遅れてしまい、小・中学校を一人の校長が管理することになっていた関係上、300m程離れていた両校の間を校長が毎日自転車で往復して管理していたということでした。

ご存じのように、小学校では原則的に担任が全ての教科を指導しますが、中学校ではどの教科もより専門的になるために、教科毎に担任が替わる教科担任制になっています。また、小学校は授業時間が1時間あたり45分で、中学校では50分で進められています。このように、小・中学校間には制度上やシステム上の大きな違いがあります。しかし、そういった現実を踏まえながら、互いに理解し合うことや、互いにできそうなことはすぐに取りかかってみるような、チャレンジ精神も大切だということです。

豊里小中学校でも校舎一体化後は、小学校4年生以上で中学校の教師による教科担任制の授業を行っており、子どもたちからは分かりやすいという感想が聞かれるとともに、以前より教科への関心が高まって来ているということです。

また、校舎一体型の場合の工夫例としては、チャイムを別々に鳴らすことは授業の混乱を招くので、例えば小学校は休憩時間を5分長く取るとか、中学校は5分早めに授業開始することなどによって解消できるということでした。

小中一貫教育の最大のメリットは、児童一人一人について小学校段階の状況を中学校に引き継ぎ、見守り連携して指導できるということ。そのことによって、学力向上や生徒指導上の問題解決等が期待でき、中学校側からすれば小学校の先生方が温かく見守っていてくれるという安心感によって、中学生の情緒の安定や心の成長にもつながっているということでした。さらに、全教職員が何らかの形でかわりながら、9年間で子どもたちを育てるという視点から、小・中学校の教員相互のチームワークが次第に高まり、その効果がそれぞれの指導にも生かされているということでした。そういった観点からも、小・中学校の先生方が同じ職員室で暮らすことが望ましいということです。

しかし、先進校にあってもいまだに難しい点は、例えば小学校の運動会と中体連関係行事や文化的行事等々のように、小・中独自の行事を天候による調整や各学年が主役となるようなことも考慮しながら、どう位置付けるかなどということだそうです。

最後に、先生方からいろいろな質問が出されましたが、経験に裏付けされた納得のいく解答に、先生方も目から鱗といったようでした。